



媽祖と観音：中国母神の研究（二）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平木, 康平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006385

媽祖と觀音

——中国母神の研究(二)——

平 木 康 平

まえながら、媽祖の成立およびその展開について、少しく整理検討を加えておきたい。

まず、媽祖の出生に関して、清の翟灝の『通俗篇』によると、その「神鬼、天妃」の条に、

潜説友の『臨安志』にいふ、神は五代の時の閩王の統軍兵馬使、林願(愿)の第六女為り、能く席に乗り海を度り、島嶼に雲遊す、人は龍女と呼ぶ、宋の雍熙四年(九八七)に昇化す、とあり、また、明の張燮の『東西洋考』巻九によれば、

媽祖は、年を経るに従つて、ますますその尊崇の度を増し、清初には、天后とも称され、地域的にも華南にとどまらず、北は渤海湾に面する沿岸にまで、南は東南アジアにまで及び、さらには朝鮮、台湾、琉球、日本をも含む広い範囲にその信仰圏は拡大していった。清代には、航行するどの船にも、きまつてその女神像が祀られ、各地の港町には必ず媽祖廟や天后宮などが建立され、盛大な祭がくり広げられた。媽祖、もしくは天妃、天后に関する研究は数多いが、その主なもの

には、顧頤剛「天后」、『民俗』第四一・二期合刊)、周振鶴「天后」(『民俗』第六一・二期合刊)、容肇祖「天后」(同上)、李猷璋「媽祖伝説の原初形態」(『東方宗教』第一一号)などがある。今、それらを踏

これらの記事に據ると、媽祖はもと地方官の娘で、未来を予見したり、病気を治療したりできる、特異な靈能を具えていた巫祝の類であったことが窺える。その出生の年代については、諸説紛々として正確とある。

なところはわからないが、最も古い時代に引きあげるのが、『三教源流搜神大全』⁽¹⁾で、唐の天宝元年(七四二)、次に、『天后聖母聖蹟圖志』⁽²⁾が、宋の建隆元年(九六〇)、これはさきの『東西洋考』が一説として宋の太平興國元年(九七六)とし、『莆田県志』が太平興國四年(九七九)とするのに近い。最も新しい時代にもつてくるのが、『東西洋考』で、宋の元祐八年(一〇九三)である。ただ、『三教源流搜神大全』の天妃の記事は、他書には見られない小説的要素が多く付加されているため、歴史的事実の記録としては、信を措きたいきらいがある。

また、その没年に関しては、諸書はほぼ同じ時期にまとまっており、宋の雍熙四年(九八七)二月二十九日としている。ただ、『東西洋考』の本文も同じ説であるが、その生年を元祐八年(一〇九三)とするのは、生没年が逆転して明らかに矛盾している。同書は、一説としてその没年を景德三年(一〇〇六)十月十日としている。

以上の諸説を勘案すると、他にも異説はあるものの、その生年については、大体、九六〇年から九七九年の間に、また、その没年は、九八七年から一〇〇六年の間に、それぞれ限定でき、その生存年代を一〇世紀後半において考えてよいであろう。

元の王元恭の『四明統志』巻九によれば、

室居して、未だ三十ならずして卒す、宋の元祐の間(一〇八六一一〇九三)に邑人之れを祀る、水旱、癘疫、舟航の危急には、禱ること有れば輒ち応ず、

とあり、林氏の女は嫁すことなく、三〇歳にとどくまに没し、その後およそ一〇〇年、一一世紀の末に初めて郷里の人々に祀られるようになったとされる。

『莆田県志』には、昇化後、「常に朱衣を衣て、飛びて海上に翻る、

里人之れを祀る、雨にも陽にも禱れば応あり」とあり、神として祀られ出したのが何時とは特定していないが、没後まもなくの頃から、大雨のときも、早魃のときも、祈れば応驗があつたため、すでに村人たちの信仰を集めていたらしい。

当初は、これといった祠廟もなかったが、『臨安志』に引く丁伯桂の「順濟聖妃廟記」に、

莆の寧海に堆有り、元祐丙寅(一〇八六)夜、光氣を現はす、環堆の人、一夕同じく夢む、曰く、我は湄州の神女なり、宜しく我に館すべしと、是に於いて祠有り、聖堆と曰ふ、

とあるように、元祐年間に至って、神像を備えた、かなりの規模の廟宇が莆田寧海に建てられ、その神格を確かなものにしたと考えられる。その初め媽祖は、あくまでも莆田という一地方の人々に限って信仰されていたに過ぎなかったが、宣和五年(一一二二)に至って、俄然、世人の注目を浴びるようになった。『莆田県志』によれば、この年、給事中の路允迪が高麗に使したとき、途中で震風にあい、八隻のうち七隻が沈没したが、彼の乗る船にだけ、神がマストに降り、遭難を免がれたという事件がおこった。その靈異譚が朝廷に聞こえ、「順濟廟」の額を賜わることになった。この時以降、媽祖に対する信仰は、急速に莆田から外に広がり、各地につきつきと祠廟が建てられるようになった。

南宋の時代に入ると、都は臨安、すなわち杭州に遷されたが、杭州は華北につながる大運河の南端にあたり、また、錢塘江が杭州湾に注ぐ河口に位置した都市で、古来、水上交通の要衝であった。加えて、華北を金に奪われて財政的にも窮乏した南宋政府は、外国船の渡来を歓迎し、政府の管理のもとに積極的に対外貿易の拡大にのり出し、財

政のたて直しを企てた。さらに、この時期には、造船技術や航海術に長足の進歩がみられ、ますます海上交通が発展し、通商圏が飛躍的に拡大した。

このように海運が重要な地位をしめるようになった時代の中で、媽祖に関する靈驗譚は、沿岸づたいに福建より浙江周辺にまで伝わり、海運に従事する人々の間に、媽祖の信仰はまたたくまに広まっていった。やがて媽祖は、民間における私的な祭祀をまたたくまに広まっていった。やがて媽祖は、民間における私的な祭祀を受けるに止まらず、朝廷による公的祭祀にも組みこまれてゆくようになった。

南宋から元明清にかけて、媽祖に対する敬信の度合いが、いかに高まっていったかは、朝廷から加えられた諡号の増加の迹をただるだけで、歴然と知ることができる。以下、煩をいとわず時代順にその諡号を列挙しておこう。

紹興二五年（一一五五） 宋高宗封崇福夫人
紹興二六年（一一五六） 高宗封靈惠夫人
紹興二七年（一一五七） 高宗封靈惠昭応夫人
紹興二九年（一一五九） 高宗封崇福靈惠昭応夫人
乾道二年（一一六六） 孝宗封為靈惠昭応崇福夫人
淳熙一年（一一八四） 孝宗封為靈惠昭応崇福善利夫人
紹熙三年（一一九二） 光宗特封靈惠妃
慶元四年（一一九八） 寧宗加封靈惠助順妃
嘉定元年（一二〇八） 寧宗封為靈惠助順顯衛妃
嘉定一〇年（一二一七） 寧宗封為靈惠助順顯衛英烈妃
嘉熙三年（一二三九） 理宗封為靈惠助順嘉応英烈妃
宝祐二年（一二五四） 理宗封為助順嘉応英烈協正妃

宝祐三年（一二五五） 理宗封為靈惠助順嘉応慈濟妃
宝祐四年（一二五六） 理宗封為靈惠協正嘉応慈濟妃
宝祐四年（一二五六） 理宗封為靈惠協正嘉応善慶妃
開慶元年（一二五九） 理宗封為護国助順協正嘉応佑濟妃
景定三年（一二六二） 理宗封為靈惠顯濟嘉応善慶妃
至元一五年（一二七八） 元世祖封泉州神女号護国明著靈惠協正善慶顯濟天妃
大德三年（一二九九） 成宗加泉州海神曰護国庇民明著天妃
延祐元年（一三二四） 仁宗封為護国庇民広濟明著天妃
天曆二年（一三二九） 文宗封為護国庇民広濟福惠明著天妃
至正一四年（一三五四） 順帝封為海神輔国護聖庇民広濟福惠明著天妃
洪武五年（一三七二） 明太祖封為孝純正字濟感応聖妃
永樂七年（一四〇九） 成祖封為護国庇民妙靈昭応宏仁普濟天妃
康熙一九年（一六八〇） 清聖祖封為護国庇民妙靈昭応宏仁普濟天妃
康熙二〇年（一六八一） 聖祖封為昭靈顯応仁慈天后
乾隆二年（一七三七） 高宗加封福祐羣生四字
乾隆二二年（一七五七） 高宗加封誠感感孚四字
乾隆五三年（一七八八） 高宗加顯神贊順四字封号
嘉慶五年（一八〇〇） 仁宗加封垂慈篤祐四字
道光六年（一八二六） 宣宗加封安瀾利運四字

道光十九年（一八三九）

宣宗加封沢覃海宇四字

ここに列挙した年代と諡号は、『天后顯聖録』、『順濟聖妃廟記』、『莆田県志』、『杭州府志』、『元史』、『明会典』、『大清会典』その他の諸書から、取捨選択を加えて抽出したものである。資料によって出入前後があり、不確実な部分を残してはいるものの、歴代朝廷が、媽祖に対して、その尊崇の度合いを高めていった軌跡が、これによって一目瞭然であろう。

ここに掲げたりリストから、次のような事がらが読みとれる。民間において祀られていた媽祖が、初めて崇福夫人という封号を賜わって公的に祀られるようになったのは、南宋のごく初期、一二世紀の中葉のことである。南宋の都、杭州の地は、国内的には、肥沃な江南の穀倉地帯を背後にもつ回漕の要衝にあたり、国外的にも、海上交通の重要な基地であつて、漕運は国家の経済政策の基盤を支えるものであつた。従つて航海の安全を確保し、通商を發展させることは、国家の急務であつた。そうした時代の要求の中で、航海の守護神としての媽祖が、国策に副うものとして政府に迎えられたのである。媽祖の勢力の急速な拡大と、宋朝の杭州への遷都とは、決して無関係ではなかつたのである。また、南宋の歴代の天子は、ほぼすべて媽祖に一度ならず封号を賜わっているが、なかならず理宗は七度にわたり加封しているのが注目され、その時期に、漕運の重要性が一段と高まっていたことを窺わせる。そして、初めは「夫人」の封号が与えられていたが、紹熙三年（一九二）、光宗のときに至つて、昇格して「妃」の封号が加えられ、ますますその地位が向上していった。

さらに、世祖が南宋を滅ぼして国号を元と称する前年、至元一五年

（一二七八）には、媽祖は一四字にもおぼる長い封号を得たが、このとき初めて「天妃」の称が冠せられた。また、ここで特筆すべきは、この女神が初めて正史に記録されたことであり、『元史』の本紀や祭祀志に、たびたびその名が登場するようになった。

そして、この女神がさらに昇格して「天后」の号を最初に賜わつたのは清朝に入つてからで、康熙二〇年（一六八一）のことである。福建の一地方におこつた民間信仰の一巫神は、宋元明清を通じて、国家の庇護のもとに、国家の祭祀をうける航海の神として、着実に不動の地位を固めていたのである。

このように、媽祖がしばしば封号を加えられたのはそれなりの理由があつたからで、たとえば、「海寇を得るを以つて」、「海寇を平ぐるを以つて」、「漕運の效盡なるを以つて」などが、その理由の主なものであつたが、当時の航海がたびたび海賊などの危険にさらされていたことを物語っている。

この外、水災、旱魃、疫癘などを救つたこと、钱塘江の潮を退けたこと、宋を助けて金と戦つたこと、あるいは、浙江の隄を完成させたことなどの功績が、その加封の理由に挙げられており、媽祖が、単に航海の神としてだけでなく、さまざまな靈能を備えた神として祀られていたことが、あわせて知られるのである。

二

中国本土では、今日、ほとんど絶えた媽祖の信仰は、台湾において、なお民衆の間に根つき、立派に活きつづけている。そこで、次に台湾における媽祖信仰の実態について触れておきたい。

福建の莆田地方におこつた媽祖信仰は、台湾海峡をはさんで指呼の

間にある台湾へも広まっていった。その時期は、記録にあらわれる限り比較的新しく、媽祖廟として最も古い時期に属するのは、康熙七年（一六六八）、鄭成功が渡台した際にもたらした神像を祀るために建立された台南市の天后宮である。その外の媽祖廟は、ほとんど康熙二二年（一六八三）に、台湾が清朝の版図に組み入れられてから後のものである。

この時以降、台湾へ中国本土から多数の移民が入植したが、その大部分は、媽祖を生んだ福建や広東の人々で、自ずと民衆なじみの深い媽祖も彼らの守護神として、この地にもたらされた。彼らが通過した台湾海峡は、風波が荒いうえ、海寇が蝟集する地で、古来、航海の難所とされてきた。長い海岸線をもつ台湾での移住者の生活においても、海上の安全を守護してくれる媽祖は、彼らにとって欠くことのできない存在であったことは言うまでもない。

たとえば、趙翼の『陔余叢考』卷三五、天妃の条に、

吾が郷の陸広霖進士云く、台湾の往来、神跡尤も著し、土人は神を呼びて媽祖と為す、倘し風浪の危急に遇ふとき、媽祖と呼べば、則ち神は披髮して来たり、其の效、立ちどころに応ず、若し天妃と呼べば、則ち必ず冠帔して至り、時刻を稽ふるを恐る、媽祖と

云ふ者は、蓋し閩人の母家に在るの称なり、とあり、台湾海峡で媽祖が特に多く靈験を顕わしたことを述べ、この地の媽祖への崇敬が、ひときわ高かったことを窺わせる。

乾隆五五年（一七九〇）に著わされた同書には、右の話のほか、海上における媽祖のいくつかの靈験譚を載せている。

成化（一四六五―一七八七）の間、給事中陳詢、命を奉じて日本に往く、大洋に至りて風雨作り、將に舟を覆さんとす、舟に三紅灯有

りて、天より下る、遂に島に泊することを得たり、人有りて告ぐるが若し、曰く、吾輩は天妃の遣はす所と為るなりと、

このほか、媽祖が、いかに船上生活者に密着した存在であったかを如実に示す説話が、清の郁永河の『海上紀略』に記載されているので、次に引用しておく。

海神は、惟れ馬祖最も靈なり、即ち古への天妃神なり、凡そ海舶の危難は、禱る有れば必ず応ず、多く目に神兵の維持し、或いは神の親しく至りて救援するを覩る者有り、靈異の蹟、枚挙すべからず、洋中に風雨ありて晦暝なる、夜黒きこと墨の如くなるるとき、毎に檣端に於いて、神灯を現はして祐を示す、また、船中に忽ち燭火を出だすこと灯火の如く、檣に升りて滅する者有り、舟師是れを馬祖火と謂ふ、去れば必ず覆敗に遭ひ、奇験あらざるなし、船中に例として馬祖棍を設く、凡そ大魚水怪の船に近づかんと欲するに値へば、則ち馬祖棍を以つて、船舷を連撃すれば、即ち遁げ去る、

船底の板一枚下は地獄だと言われる危険の多い海上で、自然の猛威や海賊に襲われたとき、今日ほどのすぐれた装備をもち合せない船上の生活者にとって、頼れる者はただ神仏よりほかにいなかったであろう。右の説話から、そういう船乗りたちの、媽祖に対する熱い思いが、よく伝わってくる。

ところで、媽祖信仰の台湾への移入は、単に民間人の手によってなされただけでなく、国家的レベルでも、大規模に行われた。一例をあげれば、乾隆五一年（一七八六）、台湾において林爽文の大乱がおこった。翌年、將軍福康安は、大軍を率いて討伐に赴き、台中の鹿仔港に上陸し、三ヶ月で平定した。この討征が安きを得たのは、媽祖の庇護

によると考えた康安は、奏請して上陸地点の鹿仔港に天后宮を建てて媽祖を祀った。鹿仔港にある「勅封天后宮碑記」に次のように言う。

台湾は海東に僻処し、康熙壬戌（一六八二）より版図に隸入す、商賈貿易せんとし、洋を横ざりて来往す、咸な神庥佑済に頼る、乾隆五十一年冬、逆匪林爽文、乱を作し、滋蔓鷓鴣張す、我が皇上特に協辦大学士嘉勇公福康安に命じて將軍と爲し、巴魯の侍衛數百員、勁旅十余万を統率し、五十二年十月杪に於いて、崇武由り放洋す、時に北風盛んに發するに際し、洪波浩湧す、三軍櫓を聯ぬること數百艘、海に漫りて東來し、一日に齊しく鹿仔港に登る、繼いで糧餉軍裝、分馳文報、舳艫羅織、均しく虞なきを保す、…故に軍威大いに振ひ、向ふ所披靡し、日を尅して渠を擒にし巢を燬き、全台を收復す、將士命を用ふと曰ふと雖も、凡そ此れ亦た皆仰いで天后の昭明に頼る、赫として護国庇民の功、威靈顯著なる者有るなり、將軍、天子の命を奉じ、徳を崇び報效し、鹿に就きて地を拵び、廟宇を建造し、以つて奉祀す、

このように軍隊の大規模な艦船の航海においても、媽祖の支援を仰いでいたことが知られる。かくして朝野を挙げて媽祖を崇敬したため、媽祖廟は台湾各地に相次いで建立された。

昭和九年の調査によれば、台湾全土において、媽祖、すなわち天上聖母を主神とする寺廟の数は、大小あわせて、三三五の多きに達している。州庁別にみれば、

台北州	三七	新竹州	二五
台中州	八一	台南州	一一七
高雄州	六六	三庁	一五

となつており、台湾海峡沿いの地域に、その寺廟が圧倒的に集中して

いることが知られる。

また、同じこの調査によつて、台湾の全寺廟の主神を種類別で見ると、数の多い順に、一位「福德正神」七一八、二位「王爺」五三七、三位「觀音」三三六、四位「天上聖母」三三五、五位「玄天上帝」二〇四、六位「閻帝」一五七、となつており、天上聖母の数が觀音の数とほとんど等しく、ともに大きな勢力をもっていることがわかる。

さらに今度は、觀音の数を州庁別にみると、

台北州	五七	新竹州	六四
台中州	五四	台南州	八二
高雄州	六四	三庁	一五

という数字が示されており、さきの天上聖母の場合と比較すると、台北州と新竹州で觀音の数がやや上回っているものの、両者はほぼ等しい分布を示していることが注目される。

媽祖や觀音は、寺廟においてのみ祀られるだけでなく、家庭の中でも祀られた。台湾の各民家には、一家の平安を祈願するために、住居の正庁に神卓を設けて數種の神仏を並祀する習慣があつたが、その序列の筆頭に觀音を、次に天上聖母を置き、両神は連なるように祀られていた。⁽⁴⁾

ところで、媽祖、すなわち天妃は、その母王氏が觀音大士に祈請した結果、産まれてきたという言い伝えがあるために、媽祖廟では常に後堂に觀音を合祀するようになった。そのことは、清代に入つてから著わされたと考えられる『天妃顯聖錄』の天妃誕降本伝に次のように説かれている。

（林）孚の子、惟慤、諱は慤、都巡官たり、即ち妃の父なり、…王氏を娶り男一にんを生む、名は洪毅、女は六にん、妃は其の第

六乳なり、二人陰かに善を行ひ、施濟を樂しみて、觀音大士を敬祀す、父、年四旬余、毎に一子の單弱なるを念ひ、朝夕香を焚きて天に祝し、哲胤を得て宗支と為さんことを願ふ、慶歲己未夏六月望日、齋戒し大士を慶讚す、……是の夜、王氏、大士の之れに告ぐるを夢む、曰く、爾が家は世々善行を敦くす、上帝式つて佑くと、乃ち丸藥を出し、之れに示して云く、此れを服すれば、當に慈濟の眊を得べしと、既に寤む、歎歎然として感ずる所有るが如し、遂に娠む、

この説話によれば、天妃は、その両親が觀音に帰依し、送子を祈願した結果、授けられた觀音の申し子だということになる。

右の話の続きに、次の年、宋の太祖の建隆元年（九六〇）三月二十三日の夕方、一道の紅光が西北より室中に射し込んだかと思うと、目映い輝きが生じ、異香がたちこめ、突然王氏の腹が震えて、すぐに天妃が寢室に産まれた、との記述がある。ここには、他の諸書には記録されていない天妃誕生の細かい時間や、その時の様子の詳しい描写がみられる。

この『天妃顯聖録』の作者や制作年代は不明であるが、こうした類の誕生伝説は、時間的に距離が開けば開くほど、より精細になり、より増幅されるのが常である。もとより、これは天妃の權威をさらに高めるとともに、その信仰を一層強めるべく、潤色加増されたものであつて、史実にもとづくものでないことは明らかであろう。それははとみかく、実際の信仰の場では、媽祖と觀音は、縁故の深い神格とみなされ、あい寄り添うかたちで祀られてきたのである。

ところで、今日の台湾には、すでに大陸では過去のものとなつた媽祖信仰が、なお生きた姿で脈々と伝えられている。とりわけ、台南の

北港にある朝天宮は、規模宏荘で、雍正八年の改築以来、しばしば廟宇を改修し、すぐれた数々の靈驗譚をともなつて、その名声は台湾全土に伝わり、全島数千の寺廟のうちで、最も多くの信者を集めていると言われる。本廟の祭神は、主神の媽祖のほか、媽祖の分身である、祖媽・二媽・副二媽・三媽・副三媽・四媽・五媽・六媽・糖郊媽・太平媽など十体が配祀され、最も盛んな媽祖廟の姿を今に伝えている。⁽⁵⁾

三

媽祖信仰は、遠く東海をへだてた日本にもたらされた。周知のように長崎市内には、この地に渡來した中国人によつて建立された、いわゆる唐三箇寺がある。興福・福濟・崇福という唐寺は、いずれも「福」字を寺名に含んでいるために、あわせて三福寺とも称されている。また、おかれて創建された聖福寺を入れて、唐四箇寺という場合もある。⁽⁶⁾ 元和六年（一六二〇）、南京地方の出身者たちによつて、まず興福寺が建立された。つづいて漳州（福建省）地方の人々によつて福濟寺が、さらに寛永六年（一六二九）に、福州（福建省）地方の人々によつて崇福寺が、あいついで建立された。それぞれの出身地にちなんで、興福寺を南京寺、福濟寺を漳州寺、崇福寺を福州寺、とも呼んだ。

当時、耶蘇の禁令が布かれ、その殘党の追及が日まじに厳しさを加えていたが、唐人たちの間にもキリシタンがひそんでいるとの風聞が伝わり、唐人たちも公儀の取調べを受けた。累の及ぶのを恐れた唐人たちは、耶蘇の邪教を信じていない証しとして、あわせて祖先の供養のために、寺の建立を思い立ったとも言われている。

さて、崇福寺の開基、福州人の超然は、長崎在留の同郷人たちに招請されて渡來した僧侶であるが、その法系は明らかでなく、嗣法の僧

ではなかったとされている。とはいえ、禪の修行を積んだ人物であることは確かだ、崇福寺が禪宗寺院として開創されたと考えられる。

三代住持、道者は、隠元の法弟巨信の弟子であり、また、承応三年（一六五四）、長崎に来て同寺に入った隠元は、自分たちこそが臨済禪宗の直系だと自負し、その後同寺は隠元の法系の僧しか晋山できなかった。彼らはみずから臨済正宗、臨済正脈、あるいは臨済正伝と称し、世人は法脈や綱紀の乱れた京都等の臨済宗諸派と区別する意味で、同寺を禪宗黄檗派と呼んでいた。享保年間までは、長崎の唐三箇寺の住持のなかから、宇治黄檗山の住持が選ばれる慣例になっていた。崇福寺が、長崎の他の唐寺とともに、宇治黄檗山を本山とする黄檗宗の末寺として系列化されたのは、明治九年（一八七六）以降のことである。享保年間に、唐僧の渡来が絶えるまでは、すべて唐僧が住持を務め、全く中国式の修業や寺院運営がなされてきた。従って、当時の中国の禪宗寺院の雰囲気、そっくりそのまま長崎に運ばれてきていたのである。

また、興福寺は、江西の人、真円によって、元和六年（一六二〇）に創建された。三代住持、唐僧の逸然の招請によって来日した隠元は、帯同した弟子二〇人とともに、まずこの興福寺に滞在した。崇福寺と同じく、この寺も初代から九代まで、すべて唐僧が住持を務めた臨済宗の寺院であった。

ここまで、やや立ち入って崇福寺や興福寺の沿革に言及してきたのは、この両寺をはじめ、他の唐寺も、その創建当初から、臨済系の禪宗寺院であったことを、まず確認しておきたからである。

ところで、崇福寺をはじめとする長崎の唐寺の大きな特色の一つは、いずれも禪宗寺院でありながら、その境内に媽祖を祀る堂宇を備えて

いることである。ただ、福濟寺は、昭和二〇年、原爆の投下によって、建物や寺什の一切を焼失し、媽祖堂（青蓮堂）も烏有に帰した。

興福寺の媽祖堂は、堂前に「海天司命」と大書された扁額を掲げているところから、海天司命堂とも称されている。現存の建物は、寛文三年（一六六三）の市中の火災直後に再建されたものであるが、建築様式は和風を基調としている。堂内正面に、天上聖母菩薩、すなわち媽祖が安置され、その右に千里眼（赤鬼）、その左に順風耳（青鬼）が、脇立として添えられている。さらに、右端に三官大帝菩薩、すなわち天官、地官、水官の三帝を、また、左端に閻聖大帝菩薩を、それぞれ配している。堂内に掲げる「海天司福主」と題する大額は、寛文一〇年（一六七〇）、第四代住持道亮の頃のものとい伝えられている。

さて、今日の崇福寺の本堂は、大雄宝殿であるが、もとより大雄とは釈迦をさし、釈迦三尊像がこの本尊である。大雄宝殿の背後に、もとは禪堂であった開山堂があり、その向って右側に媽祖堂が位置し、渡り廊下でつながっている。

今でこそ、媽祖堂は、その伽藍配置からも祭せられるように、決してこの寺院の中心的存在ではない。しかし、崇福寺草創時、最初に建造された堂宇が、この媽祖堂であったと言われ、むしろ媽祖堂が、当初その主役であったと考えられる。この媽祖堂は、その前方に石だたみをはさんで媽祖堂門を備えており、往時は独立した区画であったと推測される。ちなみに、国内で現存する媽祖堂門は、唯一ここだけで、その建築様式は、媽祖堂と同じく、単層入母屋造り、棧瓦葺で、表側はいわゆる黄檗天井となっている。

ところで、崇福寺という寺名の由来については、従来、寺伝を含めて一切言及されたことはなかったようである。崇福寺の建設が、他の

堂宇に先がけて、まず媽祖堂から始められたという事実に着目するとき、その寺名の命名について、思い当たるところがある。

それは、すでに述べたように、媽祖が、紹興二五年（一一五五）に、初めて高宗から謚号を賜わったが、その封号が「崇福夫人」であったことである。さらに紹興二九年（一一五九）には、「崇福靈惠昭応夫人」に封ぜられている。この年、『莆田県志』によれば、江口の海寇が猖獗をきわめたが、媽祖が風に駕して現われ、それを一掃して去った。さらにその年に疫癘が流行したが、媽祖の下した靈験により疫癘が愈えたため、その封号が加えられたという。

また、宋の洪邁の『夷堅志』支戊卷第一、「浮曦妃祠」の項に、

紹興三年（一一九二）、福州の人鄭立之、番禺自り海に及びて郷に還る、舟、莆田の境なる浮曦湾に次る、未だ出港に及ばざるに、或人來たりて告ぐ、賊船六隻有りて近洋に在り、盍ぞ脱計を謀らざると、是に於いて舟師、崇福夫人廟に詣りて救護を求む、…此の夫人は今進んで妃と為ると云ふ、

とあり、その当時、福州の莆田地方では、媽祖を崇福夫人と称していたことが知られる。これらの事実と、長崎に渡来した福州人が自分たちの建立した寺廟に崇福寺と命名したことを遽かに結びつけることは牽強附会であるかもしれないが、しかし、あながち無縁だと言いつけることもできないように思われる。⁷⁾

ところで、崇福寺開創時の檀越たちは、福州を中心として、東は長崎、西は遠く東京、すなわち今日のベトナムに至るまで、広範囲に貿易を営む商人たちであった。当時の有力な檀越の一人、林楚玉夫妻の墓が、今もなお三門から第一峰門に登る石段の途中の左側に残されている。彼らにとって、危険の多い航海をいかに安全に乗り切るかは、

何よりも優先する重要な課題であった。

当時の貿易船の常として、その船内に媽祖像を安置していたが、目的地の港町に到着すると、まず媽祖像を船から揚げ、陸地のしかるべき寺廟に移し、停泊の期間中は、媽祖がそこで航海の疲れをいやすようにと配慮したのである。この儀式は、「ボサアゲ」と呼ばれ、『長崎名勝図絵』にもその様子が描かれている。

「ボサアゲ」という呼び方は、中国人が媽祖を「ボソ」と発音したが、それが訛してやがて「ボサ」になったところから出てきたと考えられる。その証拠に、『唐船蘭船長崎入港便覧』には、「唐船湊に入て後、媽祖揚げといふことあり」とあって、「ボサアゲ」に「媽祖（祖）揚げ」の字を充てている。しかし、一般には「菩薩揚げ」の字を充てるのが普通である。ちなみに崇福寺では、媽祖堂を菩薩堂とも書き、媽祖堂門を「ボサモン」とも呼んでいる。

また興福寺の媽祖堂では、媽祖を「天上聖母菩薩」として祀り、崇福寺では、媽祖を「天后聖母」「天妃」「菩薩」とも称している。いずれも媽祖を菩薩として捉えている点が注目される。これは、媽祖の信仰が日本に伝えられた最初から、媽祖が、仏教系の一菩薩として完全に仏教の中に組み込まれていたことを示しているであろう。

一般庶民の実際の信仰の地平においては、本来その系統を異にする神仏が、何の抵抗もなく渾然と融合したかたちで受容されることは、しばしば見受けられる。崇福寺をはじめとする唐寺が、最初からはつきりと禪宗寺院として出発しておりながら、中国の一地方の民間信仰から出てきた媽祖を、異和感を示さず内側に包みこんでいるのも、その一例であろう。

こうした融合化の傾向は、日本において初めて現われたのではなく、

すでに中国において認められるのである。中国の宗教の特色の一つは、さまざまな神仏の同時存在を許す、いわゆる多神教的性格を有していることである、と言われる。元明以来、三教同源思想が唱えられ、三教のいずれかが主導権を握りながら、諸々の神仏をその支配下に吸収し整序して、その組織化をはかる動きが展開されてきたが、唯一神をおし立てて、他の諸神仏を排除する動きは、普通ほとんど見られない。

それはさて、崇福寺の媽祖堂の内部には、正面に精巧な女体に造られた媽祖像が、美しい錦の衣裳を襲ね着し、椅子に腰かけている。その両脇に一体ずつ侍女が立って寄りそい、左壇に大道公(地官)、右壇に九鯉湖八仙(水官)その他の諸神が祀られている。また、前方の敷瓦の上に、向って右に、左手を耳にあて聞き耳をたてる赤面の順風耳、向って左に、左手をかざして遠方を凝視する青面の千里眼とが立ちただかつて媽祖を警護している。堂内の左右にしつらえられた媽祖棚(ばさだな)は、「ボサアゲ」した媽祖を安置した場所である。

堂の内外には、数多くの額が掲げられている。外廊の正面には、「高登彼岸」「万里安瀾」の扁額が重なり、左右の柱に、当寺中興の祖、即非の筆になる「揚帆登宝所」「慈愛見婆心」の聯額が掛けられている。堂内には、正面に「海不揚波」の扁額が、左右の柱に「體帝心以濟人登任席波濤之上」「乘坤德而習坎駕津梁天海之中」の柱聯が下がるが、いずれも崇福寺の建立、維持に尽くした檀越の一人、魏之琰の手蹟とされるものである。

そのいずれの文面においても、媽祖に向って航海の無事を祈請する信者たちの厚い信仰心が、投影されているのを見ることができよう。媽祖の本拠地である福州の人の手によって立された崇福寺が、唐三箇寺のうちで、最も媽祖を祀ることに熱心であるのは、媽祖の結構の盛

大なことによって、あるいは、その祭りを今日なお賑やかに存続させていることによっても窺われる。

媽祖祭は、幕末まで、年に三度、三月・七月・九月の各二三日に、唐三箇寺が輪番で行っていたが、現在では、旧暦の三月二三日に、崇福寺においてのみ華僑の手で続けられている。三月二三日に媽祖の祭りが行われるのは、この日がその誕生日にあたることとされてきたからである。長崎奉行をつとめた中川忠英の『清俗紀聞』は、寛政年間(一八世紀末)、長崎に来訪した浙江・福建の人々から聴取したかの地の風俗を、日本人の絵師に描かせ、それに解説を付したものであるが、その中にも、次のように言っている。

三月二十三日、天后聖母誕日の祭りあり、…もつとも船神ゆゑ、走洋の人は都て信仰し、家内の庁堂あるいは外の間にも、清浄なる所に神像を安置し、香・燭・菓子・菓物等を種々供へ祭るなり、

この記述によれば、舟航に従事する人々は、こぞつて媽祖を信仰し、各家庭の中でも神像を祀っていたことが窺える。

ところで、すでに述べたように、『天妃顯聖録』の中には、媽祖が観音の化身だとする説話が記されていたが、こうした説話は、日本では、媽祖が伝えられた当初から信ぜられていた。例えば、享保四年(一七一九)、西川如見が著わした『長崎夜話草』に、

福建の南海に莆田といふ所あり、此浦の漁家林氏の娘生れて靈異あり、十余歳にして我は則ち海神の化身なり、海洋に入りて往来の船を守護すべしとて忽ち海水に没死す、則ち莆(莆)田に廟社を建てて船神と崇め祭りて今にあり、大明の天子より天妣老媽の諡号を賜り、観音の化身として唐土の諸船甚だ尊敬す、

とあり、そのことを裏づけている。媽祖を祀る寺廟は、その本仏としての観音を併せて祀ることが多かったが、長崎の唐寺もそれを踏襲している。

今日の崇福寺には、大雄宝殿と向いあうかたちで護法堂が配置されている。護法堂は内部が三つに区分され、向って右が閔帝堂、向って左が天王殿（韋馱殿）、そして真中が観音堂であるが、ここに安置されている観音像は、もともと禪堂に祀られていたもので、禪堂が廃されて開山堂になったとき、ここに移置されたものである。現在、開山堂の外廊には、「法海慈航」の扁額が掲げられているが、これは「慈航大士」としての観音を安置していた禪堂時代の名残りだと考えられる。

また、興福寺の本堂である大雄宝殿の本尊はもとより釈迦如来であるが、脇立は準提観音菩薩であり、やはりここでも媽祖とともに観音が併せ祀られている。しかも、本堂の外廊の正面には、「航海慈雲」の大額が掛けられていることによっても、当寺がまた航海を業とする人々と密接な関係にあったことを窺わせる。

航海の安全を確保したいと願う民衆にとつてみれば、御利益さえ受けられれば、観音であれ、媽祖であれ、いずれでもよかつたのであり、神仏の素姓や戸籍を調べて区別する考えもなく、また、その必要も毛頭なかつたであらう。

四

観音菩薩は、一心に人がその名号を称えると、その音声を観じて、ただちにその者のあらゆる災厄や苦難を解除する力を備えている。また、その時その場によって、あるいは相手によってさまざまな姿を現すが、普通は三三の身相を示すとされる。『妙法蓮華經』観世音菩

薩普門品、すなわち俗にいう『観音經』には、その威神力によって免れることのできるさまざまな苦難や、また、それによって与えられる種々の福德が列挙されている。たとえば、その一節に、

若し是の観世菩薩の名を持つる者有りて、設ひ大火に入るも、火も焼くこと能はず、是の菩薩の威神力に由るが故なり、若し大水の漂はす所と爲るも、其の名号を称すれば、即ち浅き処を得ん、とあり、観音菩薩の名号を称えさえすれば、誰でもたちどころに火難や水難から救われると説かれている。

『観音經』は、一般庶民にも極めてわかりやすい現世利益の教えを説いているため、それにもとづく観音信仰は、現世主義的な中国人の好尚によく適合し、すでに六朝時代から広い範囲で盛んに行なわれていた。それは、民衆の実際の信仰体験をつづつた各種の観音靈驗譚が、多く世に出ていることでも知られる。

その最も早いものとして、六朝時代の観音信仰の具体的事例を集めた書物に、宋の傅亮の『光世音応驗記』、宋の張演の『続光世音応驗記』、齊の陸杲の『繫観世音広験記』などがある。なお、観音は、世に光を与える名（音）の持ち主という意味で、古くは光世音とも訳され、また、なやめる衆生（世）の音声を観ずるものという意味で観世音とも訳された。

その中で、いま特に注目したいのは、観音によって、水難や船難から救われたという説話が頻りに出てくる点である。まず、『光世音応驗記』は、すべて七ヶ条からなるが、その第六条に、至心に光世音を呼んで船難より免がれた話を載せている。それを引用する。

徐栄なる者は、瑯琊の人なり、常て東陽に至り、還りて定山を経たり、舟人慣れず、誤りて洄瀆の中に墮つ、濤波の間に遊舞し、

垂んと沈没せんと欲す、榮復た計なし、唯だ至心に光世音を呼ぶ、斯須の間に、数十人力を齊へて船を撃する者有るが如し、腹中に涌出して、平流に還り得たり、江に沿ひて還た下だる、日已に暮に向ひ、天大いに陰闇たり、風雨甚だ駛く、向ふ所を知らずして、濤浪転た盛んなり、榮、絳を誦して口に綴めず、頃く有りて山頭を望見するに、火光の赫然たる有り、柁を廻らして之れに趣き、逕ちに浦に還るを得、船を挙げて安穩たり、既に至れば、亦た復た光を見ず、同旅之れを異とし、人火に非ざるを疑ふ、明旦、浦中の人に問ふ、昨夜山上は是れ何の火光ぞと、衆皆愕然として曰く、昨は風雨此くの如し、豈に火の理有らんや、吾等並びに見ずと、然る後に其の神光たるを了せり、

すでに、南北朝宋の時代から、実際に観音がその靈能によって、その名を称える人を船難から救出すると、人々が信じていたことを、この説話は物語っている。さらに興味深いのは、沈没せんとする船を数十人が力を揃えて持ち上げるようだ、とする表現や、山上の火光が船に進路を教えるという筋書きが、さきに述べた媽祖靈驗譚の筆致と極めて類似している点である。

また、『統光世音応驗記』は、すべて十ヶ条からなるが、その第十條に、次のように言う。

平原の人韓当、嘗て呼陀河を通れり、中流にて舟溺る、便ち光世音を称す、尋いで水中に白物の龍の如き形有るを見る、流れ静まり、風垢み、俄にして岸に至る、水裁かに膝に至る、遂に沙(娑)を掲げて済る、

この話では、観音が白龍の姿となつて現われて溺れる人を救うが、水の神としての龍神と観音との結合が、そこに認めることができ注目さ

れる。

さらに、『繫観世音應驗記』になると、すべて六九ヶ条のうち、実に十ヶ条がなんらかのかたちで、船難や水難に関係した内容の話になつてくる。いまは具体的な内容にはふれないが、遭難の場所は、海、河川、湖とさまざまであり、登場人物は、僧侶、役人、商人、漁師、兵士、役人の母など多岐にわたり、その信者層が拡大しつつあつたことを示している。このほか、観音信者であつた北齊の王琰の『冥祥記』、宋の劉義慶の『宣驗記』などにも多くの観音靈驗譚を載せており、観音信仰が南北朝に急速に普及したことを窺わせる。

ところで、話題を転じて、北宋神宗(一〇六七—八五)の初め、河南省汝水の上流にある香山では、古くからある寺塔の修建事業が行われ、一二世紀の初頭には、香山を観音の聖地として宣伝し繁榮させようとする企てがなされた。塚本善隆氏の説に従えば、香山の僧の依頼をうけて、汝州知事であつた蔣之奇は、王女妙善が香山で成道して観音菩薩になつたという観音伝を作つたとされる。⁽¹⁰⁾

その概要は、次のようなものである。⁽¹¹⁾すなわち、妙莊王の末女妙善は、父の命にそむいて結婚を拒み、汝州香山白雀寺の尼となつた。父は怒つて寺を焚き、諸尼とともに妙善を殺してしまつた。冥界に入つた妙善はやがて蘇生し、仙人より仙桃を授けられ、香山に入って修行した。たまたま父が悪疾で苦しんでいるのを見て、自らの手と眼を与えてその病いを治し、成道して観音菩薩となり、父をはじめ一族や臣民を帰依させた、という話である。

この妙善の香山成道物語は、婦女を中心とする観音信者に迎えられ、一二世紀末には中国全土に流布した。この物語を材料にして、元末明初に、民衆の観音信仰と講唱文学とが交わつて、通俗仏教の宣伝文学で

ある、『香山宝卷』、一名『觀世音菩薩本行經』が世に出た。『香山宝卷』の成立は、王女妙善の觀音説を社会に定着させる結果をもたらし、それまでは必ずしも女相とはされてこなかった觀音像が、もっぱら美しい女相であるとの觀念を人々に植えつけることとなった。

一方、開封より都が杭州に遷された南宋の初めごろ、觀音靈場として脚光を浴びるようになってきたものに、杭州上天竺と寧波府定海県の海上にある補陀（洛迦）山とがある。

海上交通の要衝に近接している舟山列島の普陀山は、海運が国家の重要な地位を占めるようになったのに伴い、漕運に従事する者たちの信仰を急速に集めるようになった。普陀山は、日本僧慧鑄が五台山より觀音像を持って国に帰ろうとしたところ、船がこの島で坐礁したため、像をここに安置し觀音院を建てたという伝説をもつ島である。⁽¹²⁾ 加えて、この島は、『華嚴經』に見える觀音の住む補陀洛迦山の説に結びつけて、觀音靈地として宣伝されるようになった。

先に述べたように、觀音は古くから水難や船難より人々を救う力があるとして信仰されてきたが、普陀山は、もっぱら海上交通の守護神のいる、貿易商や舟乗りの聖地として不動の地位を固めるようになった。この辺の事情を記す代表的なものを一つ挙げれば、『仏祖統記』巻四二に引く、『南湖道因の『草庵録』がある。

（補陀）山は大海中に在り、鄞城の東南の水道を去ること六百里、即ち華嚴のいわゆる南海の岸の孤絶する処なり、山有り、補陀落迦と名づく、觀音菩薩は其の中に住むなり、其の山に潮音洞有り、海潮吞吐し昼夜に評訶す、洞を去ること六七里に大蘭若有り、是れ海東の諸国朝覲を爲すに、商賈往來するに、敬を致し誠を投ずれば、濟ひを獲ざるなし、

また、杭州武林山には、上中下の三天竺寺があり、いずれも觀音を本尊とし、北宋時代に盛んになった。杭州に都を置いた南宋の時代になると朝廷の尊信をうけてますます栄え、とくに上天竺の觀音は靈驗あらたかだとされ、「天竺進香」と称する江蘇・浙江の民衆の参詣で、明清から民国時代にかけても、殷賑を極めていた。しかし、今日では、文化大革命の時、内部が完全に破壊され、残された外側の建物は、工場や倉庫に転用され、見るかげもなく腐朽し、人民から忘れられ、空しく地名にその名をとどめるだけである。⁽¹³⁾

さて、ここに至って、先に論及した媽祖と、この觀音とを較べ考え合わせてみると、多くの共通性を抽出することができるであろう。福建の莆田におこった媽祖は、当初より海上の守護神として崇められたが、觀音も古くから人人を水難から救済する力を有するものとされ、やはり航海の守護神としての性格を持ちあわせていた。従って当然のことながら、両者の信者には、ともに貿易や漕運や漁業に従事する者が多かった。

ところで、海上交通や通商の発達にともない、浙江と福建が一つの通商圏として連なり、それとともに浙江を主たる地盤としていた觀音信仰と、福建を中心の地盤としていた媽祖信仰とが、その信仰圏を重ねあわすこととなった。その職能の上で、多くの共通性を具えた媽祖と觀音は、朝野にまたがって、同じ信者層に迎え入れられ、ときには並祀され、またときには習合して一つの神として祀られるようなことも生じてきた。はなはだしきは、媽祖が觀音の申し子であるとの習合説話まで作り出されてきた。

ただここで、両者を結合する媒材の役割をはたしたのが、宋朝の杭

州への遷都であったことを忘れてはならないであろう。そして、通商を重視し、そのため航海の安全を確保したいという意図のもとに、両者をあわせて尊崇した宋朝の政策も、両者を接近させるにあずかって力があつたと考えられる。

両者は、通商圏の拡大にもなつて、台湾や日本の例に見たように、多くの場合セットになつて、華南から外に向つて、各地の港町へ急速にその信仰圏を広げていった。ただ注意すべきは、各地の媽祖を主神とする廟堂には、ほとんどの場合、観音が添わっているのに対して、観音を主神とする寺廟には、必ずしも媽祖が並祀されていないことで、そこに観音の、媽祖に対する優位性を看取することができよう。つまり、それは仏教側の主導で、観音と媽祖との習合化が進められたことを意味しているのではなからうか。

また、すでに北宋の時代から、『香山宝卷』などの流布によつて、観音の女神化が進行していたが、それに加速を加え、南宋の時代に、女神としての観音の確立を促したのは、女神である媽祖の影響ではなかつたか、とも考えられる。

ところで、従来、観音信仰は主として仏教学の領域で取り扱われ、他方、媽祖信仰はもっぱら中国学の分野で問題にされ、両者は別個に切り離されて研究されてきた。しかし、実際の民衆の信仰レベルでは、両者が渾然と融合しているのを見ると、両者を分断して研究している限り、この真相は明らかになつてこないという点か、本稿の主張の一つでもある。

註

- (1) この書は、清の宣統元年の長沙葉德輝刊本を影印したものが、民国六九年台北の聯経出版事業公司から出版されている。同書一八六―七頁参照。
- (2) 容肇祖「天后」、『民俗』第四一・二期、民国一八年）所引。
- (3) 増田福太郎『台湾の宗教』昭和一四四年刊、民国六四年古亭書屋影印）四―二五頁参照。
- (4) 増田福太郎『台湾本島人の宗教』昭和一〇一年刊、民国六四年古亭書屋影印）六六頁以下参照。
- (5) 増田福太郎『台湾の宗教』一六八頁以下参照。
- (6) 長崎唐四箇寺に関する記述は、本年八月に行つた現地調査にもとづいてある。とくに崇福寺については、同寺発行の『聖寿山崇福寺案内』（一九六六年刊）によつてゐる。
- (7) 福濟寺の寺名についても、天曆二年（一三二九）、文宗が護国庇民広濟。福恵明著天妃の号を加えているが、あるいはこれと関係があるのかもしれない。今はそれを指摘するに止めておく。
- (8) 即非は、明の万曆四四年（一六一六）に福建の福州に生まれ、黄檗山密雲に法をうけ、次いで隠元に印可をうけ、順治一四年（一六五七）に日本に來た。絵画にも通じ、住友家に所藏される「蓮船観音」の図は名高い。その遺言どおりに火葬し、その骨の半分を埋めた即非舍利塔が、崇福寺に現存する。
- (9) 牧田諦亮『六朝古逸観世音応驗記の研究』（昭和四十五年、平樂寺書店刊）参照。
- (10) 塚本善隆『近世シナ大衆の女身観音信仰』（昭和三〇年、山口博士還曆記念、印度学仏教学論叢）所収）参照。
- (11) 『三教源流搜神大全』（註1）一七三―六頁参照。
- (12) 『中国仏寺史志彙刊』第一輯所収『重修普陀山志』（一九八〇年、台北、明文書局印行）一四四頁以下参照。

(13)

昭和五七年八月、杭州を旅行したとき、三天竺を調査した。現在、上天竺は杭州自動化儀表廠、杭州温度表廠として使用されており、建物の外形だけが残されており、わずかに昔日の繁榮の跡をとどめている。中天竺は靈隱大隊五七綜合加工廠となっており、下天竺は倉庫に使用され、いずれも建物は腐朽し倒壊寸前であった。現在、この周辺に「三天竺」という地名が残るのみで、この地がいにしえの名高い観音靈場であったことを知る人は、ほとんどいない。

〔本稿は、昭和五八年度文部省科学研究費（一般研究C）助成による研究成果の一部である。〕

